

## ハーモニーライン会員からのメッセージ



ここでは、平成 23 年度～26 年度の総会の中で紹介された会員の皆様の気持ちをご紹介します。病気の発見、大腸内視鏡検査、定期検査、病院の選び方、手術を受ける時期、手術のあとの合併症・生活、社会復帰、気持ちの変化、将来のこと、がんとのおつきあい方、遺伝について、遺伝子検査のこと、家族の気持ち、子どものこと・・・など、テーマごとに意見をまとめていますので、関心のあるテーマのところをご覧ください。

尚、ここに掲載している内容はあくまでも個人の経験に基づく内容ですので、最終的な判断をする際には、通院中の病院の医師、看護師、遺伝カウンセラーなどに相談されることをお勧め致します。

### 1. 病気の発見

- 4年前に大腸の検査で見つかりました。おじいちゃんが大腸がんで、私は小さいときからお腹が弱くて下痢もしていました。たまたま姉の症状を聞いて、自分に似ているところがあるなと思って、病院探して大腸カメラを受けたら、大腸のほとんどのポリープがあって専門の病院を紹介され、治療を受けました。父親も高齢で心配だからと言って大腸の検査を受けたら大腸にポリープがあり、治療を受けています。甲状腺にも異常があって、がんだったのでわかった翌年に手術をしました。大腸も手術をして今は生活に支障はないです。見た目は病人ではないので、職場の人には自分が病気であることはしていないですけど、定期受診の時には仕事を休まないといけないので、上司には少し話そうかなと思っています。
- 私は17歳の時に父親がこの病気で亡くなったことを期に母親から病気のことを聞いて、母親は「私が全部知った上であなたが病院へ行きたいと言うならお母さんは付いていくし」と言われ、「この話しを聞いて病院にいきたいかどうかはあなたが自分で決めなさい」と言われて、高校生の時に修学旅行という楽しいイベントが終わってから病院へ行こうと決めて、病院へ行き検査を受けました。私が受診した時も遺伝子検査は初歩の段階で受診していきなり「浣腸しましょうか」ということでした。初診ですぐ検査しあちこち触られたり、見られたりしてFAPだろうと診断がついて、あれよあれよという間に父親と同じ病気だということがわかりました。私の場合は、ポリープも少なく進行も遅かったので、それから7年後に大腸と直腸を取る手術を受けて丸10年になります。術後はいろいろあったんですけど、ずっと対処療法でなんとかここまで来たという感じがします。
- 5年くらい前の夏、お腹が痛くなり病院に駆け込んで“多分大丈夫だけど大腸を検査しましょうか”ということで検査したところポリープが見つかり、主治医も“こんなにポリープがあるのはおかしい”と言われ、調べてもらったことでFAPという病気であることがわかりました。先生自体もこの病気についてわかっていない感じでした、治療法も

大腸を切除するしかないと言われていました。自分の仕事が朝から昼まで機械に付きつきりですので、大腸を切ることでそんなにトイレに行くようであれば今の職場に居られないなと思いました。いろいろ調べていくところにたどりつきまして、今は地元で診てもらっています。ポリープの方はできていないので、年に3回診察を受けています。それでもポリープの数は減っているのですが、年3回診察しなくてもいいじゃないかと言われていて。このまま順調に行ってくれればいいかなと思っています。



## 2. 大腸内視鏡検査

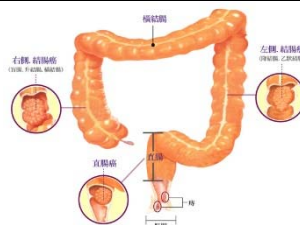
- 大腸がんの検査は嫌だと思ってしまう方もいらっしゃるかもしれないけど、がんになる前にポリープを内視鏡で先に取り取って行くことで、がんになってからの要らない出費をいかに抑えるか、体力を温存できるか（治療による副作用で苦しまなくて済むため）、時間がどれだけ節約できるか（長期的な治療負担、通院負担）、家族に迷惑をかけなくてすむか（通院時の付き添い）・・・メリットの方が大きいと思う。
- 私の病気のきっかけは自分のおじいちゃんが大腸がんで、昔から私はお腹が弱いですが2年前にFAPと診断を受けました。自分でネットからいろいろ調べたのですが、全然いいことが書いていなくて、たまたま、SNSでこの病気のコミュニティがあって、“大腸を切らずに何かできる方法はないのか”ということを開きかけ、大腸も全摘はなくてポリープを取る治療方法があるということを知りました。この患者会に来て思うのは、大腸を切っている方と大腸のポリープだけをとっている方が半々くらいなんだなと思いました。このまま、大腸のポリープを取るだけで行けるのか、いつかはどこかで大腸を全摘しないといけないのかわかりません。始めは大腸を切りたくないという思いで、大腸ポリープを取るだけの方法を選んだのですが・・・年齢のことや、この先の治療をどれだけ受けるのかなど、出したら切りがないくらい悩みがあります。同じ患者の人にしか聞けない経験談や、体験した人にしかわからないこともたくさんあるので、患者会では経験とか意見とかを聞きながら参加したいと思っています。

## 3. 定期検査

- この病気の場合、残っている臓器にポリープができやすいついていうのは、皆さんよく御存じだと思います。我々の場合、手術が終わりじゃなくて手術がスタートです。せっかく助かった命なので、定期検査だけはきちっと先生の言われるサイクルで受けながら、悪い所があればすぐ取って行くという形でケアをしていかないといけないと思うので、皆さんもそういう行動をしていただきたいなと思っています。

## 4. 病院の選び方

- 私の場合、胃と大腸にポリープがあります。病院選びは近いからとか、良いとかじゃなくて、遠くても、旅費がかかっても、いかに自分の病気をよくしてくれている先生のもとで治療することは大事であると思っています。

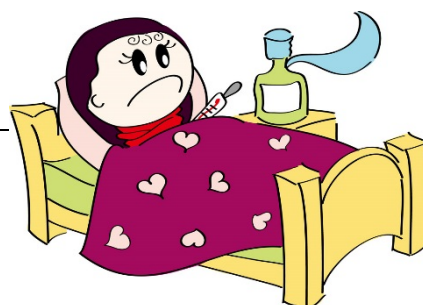


## 5. 手術を受ける時期

- 私は体調が悪い時に手術したから、このしんどいのが取れるなら早く手術して、楽になるなら早く取ってくれって言うパターンでした。でも、その分手術の後は治りがすごく遅くて、体力も何もかも落ちている状況だから、何年もかかって体力を戻すような状況でした。それを考えると、将来的に手術を考えるのであれば、身体の体力のあるうちにする方が直りもきっと早いと思います。合併症とかは、人それぞれ違うとは思いますが。
- 世代で治療方法も術後の経過もみんな違います。私だけ、デスマイドができて治療を受けています。色々な話を聞いて怖くなる方もあるかもしれませんが、知識をして持つておくことと、その状況になった時にアクションを起こして治療を受ければいいのではないかと思います。私は、手術しているんですけど、社会人になってからで、勤務していた会社が、手術するんなら、辞めてねって感じの所で辞めざる得なくてっていう状況がありました。なので、社会人になる前に学業と並行しながら術後の体調を整えていけるっていうのは、メリットという考え方もできるかなって思います。

## 6. 手術のあとの合併症

- 24年前に大腸の手術をして、その後は腸閉塞で入退院を繰り返した。また、デスマイドができて薬を飲みました。腸閉塞は今でも抱えており、疲れたり、睡眠不足とかが重なると起こしやすいです。今は、よっぽどの事が無い限りは自分で対処ができます。
- 私の場合、20歳ぐらいの時検査に行ったんですけども、えらい教授に診てもらっても病名が分からない、そんな大した病気じゃないと聞いてきました。でも、16年ぐらい前にデスマイドができてしまい緊急オペ、その後2回の手術で小腸が30cm以下になり栄養がとれず点滴をしたりしていました。今は、3ヵ月4ヵ月に1回大腸の検査を受けています。
- 69歳。父親は家族性大腸腺腫症のため56歳で亡くなり、祖父はもお腹にできもんができる病気で亡くなっていると聞いています。私は、54歳の時に発病し大腸の手術を受け小腸で人工肛門をつくり、61歳の時に胃全摘をして、デスマイドもありますけど、早期発見し適切な治療したら以外と生きられるんじゃないかなと、自分自身は思っております。まあ、長い間上手く付き合っていきたいなと思っております。
- 51歳でFAPと診断され約20年になります。61歳の時に受けた手術が最後でそれから約10年経ちます。大腸は手術で無くなり、肛門は人工肛門に変わったことと、胃が全く無いことがあります。ご飯食べた後はダンピング症候群に時々なっていましたが、それをクリアして、長く突き合って、世間様に迷惑をかけないように家族に心配かけないように、仕事もありませんし年金で暮らしております。

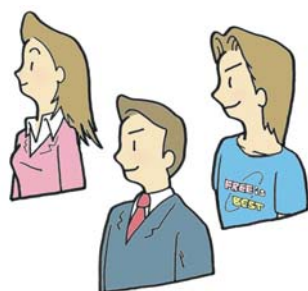


## 7. 手術のあとの生活

- 手術したのは22年前です。病院で大腸の検査をしたら「両親連れてきて。両親検査しないとあかんから」といわれて、専門の病院へ移って検査して手術を早くして年内に帰りましようと言われました。私の場合は22歳の時に手術していますが、中3の頃から定期的に貧血になっていたんです。だんだん症状が悪くなって動くとしんどいから、クッションを使って寝転がっていて、ご飯食べるのも横において食べるような状態でした。手術と言われても、怖いということはなく、ぜんぜん怖くなくて、“もうこのしんどさから逃れられるのであれば、早く取って”とっていました。本で調べても1行2行しか書いてないし、わからないけど、楽になるのであれば早く取ってくださいといった感じでした。全然恐れはなかったですが、今考えたらすごいことだったなと思うんです。幸いなことに手術して取ってもらって、人工肛門つけて3ヶ月くらいで人工肛門閉じました。最初の頃は下の方の回数も多いし、おしっこも行きたいし、外に出かけてもトイレがどこにあるのか気になってしょうがなかったです。5年経ったら頭の中でも大腸のことを少しづつ考えないような生活ができるようになって、22年経ったら食べる物は多少選びますが、頭の中で食べ過ぎたなとか考えながら、普通に頭の中で無意識でしているような感じです。
- 25歳の時にこの病気を発症して、その時ポリープが数千個ありました。まずは、鼻から便を全部出さないと手術にならないということで、イレウス管を入れて便をある程度抜き取ってから手術を受けました。その時、すでに腹膜に転移していたのですが手術で取り除き、その1年後小腸に転移しているのが見つかり手術を受けました。その後、15年生きています。今は、結婚をして子どもができ、妻もこの病気のこと、子供に遺伝する可能性があることも理解してくれています。
- 54歳の時に発病して、遺伝子検査とかいろいろな検査をしてもらいまして、ポリープが8000～1万個くらいあるので、“大腸を全部とらないといけない”という話になり、取っても直腸にがんがあるから、人工肛門を作ることを承知してくれと言われました。手術を受けることになったのは61歳の時で、43年間働いていた会社を辞めて治療に専念しようじゃないかと開き直って、手術を受けて現在71歳で手術後10年経ちます。親父は大腸がんで37歳の時に亡くなっていますが、弟や娘には遺伝していませんでした。

## 8. 社会復帰

- 母親が30歳で大腸がんで亡くなって、医師からは検査を進められていたが病院が嫌いだったのでずっとごまかして、20代の時にデスマイドが見つかって摘出しました。その後、再発して大腸と直腸の全摘の手術をしました。現在は、介護士として復帰し前向きになってきています。



## 9. 気持ちの変化

- この病気になって18年になります。私は母からの遺伝で、母の病気がわかったときには手遅れでした。医師に病気のことを聞いてからは、自分の身体について気をつけるようになりました。2年後発症した時には、母親と同じように亡くなるんじゃないかという不安を持ちました。その時思ったのは、子どもが同じ病気になったことを想定し、親として病気に負けて死んでいくという姿を子どもに見せると、子どもが絶望するんじゃないかと言う気持ちになりました。そこで、病気を前向きに捉え、仕事を一生懸命して倒れていったということであれば、子どもにも自信を持ってもらえるんじゃないかと思い開き直ってからは、気持ちが楽になりました。最初はこの病気になって悲観的になったこともあります。今はこの病気も個性かなって言う気持ちになり、この病気のおかげで色々な方とも出会えるし、そこからの御縁が生まれて人の輪が広がり、自分の人生の幅が広がっていくんだなって言う風なことを思いました。
- 病歴27年目です。私の経験したことが誰かの役にたっているのを見た時に、経験というのは独り占めするものではなく、みんなで共有することが大事だと思いました。過去の事は殆ど忘れていますが、治療に関する日誌を見た時に、前私はこんな事やってたんやなって振り返った時に、今現在動ける自分にありがたさを再確認出来て、生きている喜びも2倍3倍100倍にもなっています。自分自身を見つめることが未来の自分に勇気を与えてくれると実感しています。
- 病気が原因で～できないというのは、自分の逃げ場所を探してるんことになると思うんです。そうすると、楽だから・・・何が出来ない事があったら、私病気だから仕方無いわって言ったら、自分でほっとする部分があるんです。でも、病気になって良かったと思える部分も一杯あります。悪い事だけでなく、病気になってからの27年間の中では、お金では買えない素敵な友達に出会い、支えてくれました。私いつも思うのは、病気だからを理由にしない。このトンネル抜けたら絶対明るい、緑の一杯ある森があって、その中へ自分で行けるんだって思ってるから、辛い事も乗り越えていけると思っています。
- 人生どうなっていくかは分からないから、前向きな気持ちだけは持ち続けて、夢を持ち続ける事が大事だと思います。夢がないと、やっぱり前向きに生きようと思う気持ちもできないから。僕がいつも思ってるのは、ちょっと努力したら実現する夢から、なかなか実現出来ない夢まで一杯もって、それを自分自身が実現できるように歩いていくことが大事かなって思います。



(気持ちの変化つづき)

- 祖父がFAPで人工肛門をつけて80過ぎまで寿命を全うしました。しかし、父はFAPのことを聞かされていなかったため、末期の大腸がんの状態です。父は、自分はずっと病気を隠されていて、自分が身を持って知ったという状況にあつたので、「子どもに教えるな、話すな」という考えでした。母親はそのことに対して「子どもの人生をどう考えているのか」と夫婦喧嘩をよくしていました。その後、父親が亡くなって母は父の病気の事やその病気が私にも関係あるっていうことを初めて話してくれました。その後、検査を受けるようになり、大腸全摘を受け、デスマイド、急性膵炎にもなりました。その時、子どもの気持ちとしてはすんなり受け入れられたかというところ、10代は特に勉強の事を考えなければならぬので、検査の必要性はわかっても・・・なかなか、落ち着いたのは手術を受ける前でした。私の場合、親と子ども両方の気持ち分かるから好きな人ができてもお付き合いに発展しそうになったら逃げてしまうというところがありました。今は人生中で良いパートナーと巡り合えればと、やっと思えるようになった感じです。
- 20年前発病しました。母親からこの病気を受け継いだのですが、うまく助かって今日に至っています。その間に合併症で急性膵炎になり、危険な状態になったりしましたが、この病気になるって人生観変わって悲観的な性格がだんだんと病気に勝たないといけぬと思うようになって、前向きな気持ちになっています。前向きな気持ちは“病は気から”というように、大きいのではないかと考えています。

## 10. 将来のこと

- 私の家系は祖父、父がFAPで、叔母2人もFAPです。父が発見された時は末期の手が付けられない状態で、祖父はFAPであったにも関わらず80代後半まで生存していました。父は祖父から病気のことは隠されていたようで病気がわかった時には手遅れでした。また、父は子どもに病気のことを知らせることを拒んでいたため、父が生きている間は、父の病気も自分の病気もよくわからないままです。父が健康だったら、私たちはどうなってたかなって正直思う所もありました。高1の時に病気が分かり、遺伝カウンセリングを何度か受けて病気の事を理解していきました。24歳の時に大腸の手術を受け、その後デスマイドが見つかり化学療法を受けました。恋愛や結婚などは、自分には考えられないと思っていたが、この会で、結婚したり、子どもを産んだりしている方の話を聞いていると、自分にも出来るかなって思えるようになりました。いつか、病気を理解してくれる人と巡り合えたら良いなと思います。
- 39歳、1年前に大腸、直腸の全摘手術を受けました。私の場合は母親からの遺伝ですが、母親はもう亡くなっています。父親は病気の事とか知らなくて、病気のことがわかるのが遅くなり、デスマイドが出来て受診してわかりました。不安や落ち込むことが多かった一年だったんですけど、まだこの病気を受け止めきれっていません。結婚とか、子どもの事とか考えるのであれば、自分がまず病気を受けてとめないといけぬし、

自分が投げてしまったらダメだし・・・と思い、これから前向きに行きたいと思っています。



### 1 1. がんとのおつき合い方

- 末期がんの友達が、薬よりも、外科の治療よりも、何よりも、「生きる」という目標を見つけた時に、ものすごく元気になった。もし、がんになってしまったら、自分が今から何をしようという目標を常にもって進むと、今という環境はあつという間に過ぎてしまうので、がんに向き合う時に一番大事なものは「生きる」という目標をもつことだと思う。

### 1 2. 遺伝について

- 31歳。私で、3世代目です。祖父、父、私たちで、弟と妹も残念な事に3人とも遺伝しています。

### 1 3. 遺伝子検査のこと

- この病気になって15年になります。義弟はわざわざ受けなくていいんじゃないかという意見だったが、遺伝カウンセリングを受けてスッキリしようと言う事で家族全員遺伝子検査を受けました。

### 1 4. 家族の気持ち

- 20年前に夫の病気のことがわかり、子供も小3くらいで小さかったので、“この子に心配かけるのかな”といろいろ思いながらですけど、10年前に手術を受けその後はいろいろとありましたが無事におかげさまで元気に過ごしています。家族で支えないといけない、家族は大事かなと思います。私も泣き出したこともあるし、でもそんなに言ってもらえないし、私も何かでフッと受け入れたんだけど、受け入れられる時がくると思うんです。その時を待つというか・・・。うちはいつも家族会議でもないですけど、何か合った時は“話し合うような。何も隠さずに話しような”って家でずっと言っていたことなんです。だから、隠し事ではないけど、子供にも“わかりだした事は言おう”とか言ってお互いが話すことでオープンな生活をしてきているので、“今日、目が変わる”とか“何かあったんちゃう？”とかね。夜になろうが寝ること関係なく3人でどうするか話し合いました。結論は出たり出なかったりなんですけど、そんなことがありながら、今日に至っているんです。





## 15. 子どものこと

- ▶ 20年前に大腸の方を手術して、その時に付き合っていた彼と結婚。出産をきっかけにデスマイドがお腹にできて、父もデスマイドが出来て放射線を当てて治療したが、結局無く亡くなってしまった。正直この病気と向き合いたくなかったので、子どもを産もうかどうか迷ったが50%の確率なので全員が全員なるわけじゃないと思い子どもを作った。その子どもが中学生になったので、これからのことを考えて、もしこの病気あったら、そのことを踏まえて就職とか考えないといけないと思い検査を受けたところ同じ病気ということがわかった。その時子どもには「ごめんね、分かっている生んでしまった」という思いだったが、今は子どもがそのことをどう受け止めるかな・・・、もう一回この病気と向き合わないといけないと思っている。
- ▶ 私も二人の娘がいます。出産した後に大腸の手術をしており、その子どもたちが今2人ともこの病気になっています。娘たちは29歳と27歳で、すべては受け入れてはないないので、手術の時期が迫り苦しんでいます。
- ▶ 24歳の時に、姉妹でこの病気なんだということを知りました。その時から、姉妹で気持ちをつかち合いながら、これまでやってきました。上の子は、病気のことを理解してくれる人と縁があって結婚したが、親としては遺伝の事を背負って生きて行かなければいけないことを心配している。
- ▶ 父親の系統がみんながんで亡くなっていたので、検査ができる子宮がんや乳がんとか調べているなかでこの病気が見つかり、自分の病気のことをきちんと知りたいと思い、私が調べて、3人の子どもも全員調べてもらいました。長男は何ともなかったんですが、下の子二人が私と同じ病気でした。たとえ一人でも、どうもなかったことは、下の2人には申し訳ないけど、自分としては、たとえ一人でもそういう心配をしなくてもいいのがあったことは良かったと思っている。自分自身もこういう病気を持っていることで悩むことは、一杯あります。2人の娘には、年齢を重ねると色々な事が出てくると思うんですが、前向きに捉えてくれればいいなと思います。
- ▶ 出産して10年ぐらいたってからこの病気が分かって、高1と中3の子どもがいるんですけど、あまり症状の出ない子を病気に向き合わせるより、たとえ半年でも先送りにしてちょっとでも、青春を満喫してもらいたいという親心です。病気になるかもしれないという娘たちの下準備のために保険のことも考えています。
- ▶ この病気がわかってまだ3年ぐらいです。今は、ポリープを取りながら様子を見ています。家族に同じ病気をもっている者がいます。親は健康に生んであげられなくてごめんねと謝るが、私は親のせいという思いはなく、自分がこの病気を持って生まれてしまったので将来子ども生むときに迷うかと・・・子どもに自分と同じ思いをさせるかもし



れないっていう不安とか、実際遺伝してしまっていたら子どもに何て説明しようとか、今からすごく色々考えています。

(子どものことつづき)

- 25歳の時にこの病気を知り12年経過しています。今、2歳半の子どもがいますが、私の病気が移っている可能性が半分あるわけで、移ってほしくないと思うんですけど移っているかもしれないという気持ちも捨てきれずに生活していますが、会へ参加し皆さんの話を聞きながら前向きな気持ちでやっていきたいと思っています。
- 夫が病気を持っていて、28歳の子どもがいます。子どもには中3の時に遺伝子診断をうけさせてFAPとわかり、親として色々悩みました。
- 息子が病気で体調はいいのですが、何か頑張れという「俺病気やから良いねん」とその日暮らしの生活していることが気になっています。5~6年経過しているが、将来の事を考えて欲しいが変化の兆しがまだ見えません。
- 18歳になる息子がこの病気で、専門学校に行きはじめたんですけど、20歳までに手術をした方がいいと言う事で、8月に予定しています。本人は、全く症状がないのですが、手術しないといけない事はよくわかって、やりたくないけど、やらないといけないと思っています。
- 子どもへの伝え方ですが、手術する前に色々知っておくのは大事だと思うんですけど、めっちゃめっちゃ怖い事ばかり聞いたら、まだ若いお子さんは衝撃が強いと思うので、御両親が知識として知って見守りながら、何か変化があれば対処していく方法もあるのではないかと思います。
- 症状全然なく一回便に血が出てるのが分かっただけで、手術しましよって言われた時も嫌でね。仕事が忙しくて引き延ばしてましたけど、結局ダメって言われて手術しましたけど。先生が簡単なもんやって言われてたんで怖くなく手術できたと思うんですよ。現実全然違っていたので、どこまで伝えるかはほんとに難しい所ですよ。
- 子どもが同じ病気ってわかってから、もうどうしようかみたいな感じで、どうなっていくか不安ばかりで1年過ごしてきました。子どもには、病気の話は全然しなかったのですが、患者会へ参加するようになり病気の話一緒にしてくれる方ができました。そして、家族皆で病気の話をするようになりました。「明日行くから」、「あんたも気付けないあかで」、「お母さんも検査するからあんたも一緒行こうよ」みたいな感じで普通に話ができるようになって良かったなと思います。
- 息子は職場の上司に病気のことを言えず、仕事は休めないと言患者会へは参加していない。また、遺伝なので絶対自分は子どもは作らない、結婚もしないと言っている。親としては、なんとか患者会へ参加させたいと思っているが・・・学校卒業して就職するまで病気の話は知らなかった方が、彼の人生としては良かったのか最近悩んでいる。
- 7年前に病気が発覚し、今年になって次女の方が遺伝していることが分かりました。覚悟はしていたけどやっぱりしんどいところがあって、私は手術をしましたが娘は手術を



受ける気はなくて、ポリープを定期的に取りついでいって言っています。娘は高校2年生になりますが、反抗期の時期に遺伝子検査や大腸内視鏡検査を受けることになり、検査の結果がわかってからの初めの10日、2週間は喧嘩するたびに「遺伝」の事を責められました。最近では責めることは無くなってきて、少し冷静に話せるようになってきました。

(子どものことつづき)

- 5年前に大腸がん、ステージⅣと診断され大腸全摘をする決断をしました。その後、化学療法を継続しました。その時、主治医から家系の病気について尋ねられ・・・お父さんが胃がん、お母さんが大腸がんで亡くなり、その先代、それから先々代とがんで亡くなっていることが分かりました。そしたら先生から3代目ということなので遺伝子検査を勧められ3人の子どもが受けました。結果、1人が遺伝2人遺伝していないということが分かりました。遺伝子検査の結果については、3人の子どもたちに「3人ともお父さんとお母さんの子どもで間違いないよ」と言っていて説明しました。「DNA検査で良い結果とちょっとなっている結果が2つあって、もうちょっとなっている結果は、実はほんとくとお母さんのようになっちゃうかも分からない」と言いました。「大腸がんの疑いがあるということははっきり言えなかったのですが、胃、腸、大腸の検査する必要がある」ということ話をしました。その後、大腸の検査を定期的を受けていますが、今のところポリープは出てきていません。
- 病気が見つかって7年くらいになります。高校生の息子が遺伝子検査を受けて遺伝していることが分かりましたが、病気に惑わされることもなくなんとか今日を迎えられました。今、長男も治療を先生から受けているので安心なんですけど、今後次男のほうはどうなるかなと思って、そこが一番の不安です。もし、これで次男が病気になったら、どう乗り越えたらいいのか思っているところです。
- 息子が母親から遺伝しており、中学生くらいになってから親の意思で学校を休ませ病院に連れていっていましたが、その頃学校でいじめられていたらしくて、最近になってそのことをちょこちょこ話すようになりました。一時期は、約束した日に病院へ行かない、検査あっても行かない、当日に行方不明になったりとかしていました。この頃は、私の考えを押し付けていることの反発でした。最近では病気のことを話しなくなりまして。ただ、病院は行っているようでして報告だけを言うようになりまして、ようやく自分の意思で行動するようになりました。

